



UQ-KU Project

九州大学 研究教育交流拠点

UQ-KU Project Newsletter

2016年7月

クイーンズランド大学-九州大学研究教育交流プロジェクト

ニュースレター 7月号

UQ-KU プロジェクト スタッフ紹介

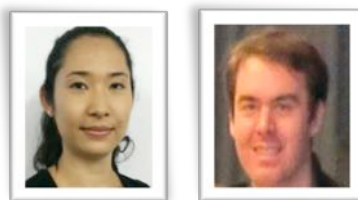
クイーンズランド大学では、UQ-KU 研究教育交流プロジェクトのさらなる推進のため、活動の中心となるスタッフを配置しています。

クイーンズランド大学において UQ-KU プロジェクトのマネジャーを務めるのは野北和宏准教授です。

野北准教授は九州大学の卒業生で、現在は講師兼研究者としてクイーンズランド大学工学部に所属しています。また、2012 年以來招へい教授として九州大学を訪問し、学部生を対象とした「エネルギー材料」についての講演シリーズを担当しています。

UQ-KU プロジェクトは多くのサポートスタッフを擁しています。Jonathan Read 氏はクイーンズランド大学機械鋳山学

の技術スタッフで、2012 年以來、留学生を対象に九州大学で毎年実施されている「工学倫理」講義シリーズを担当しています。



UQ-KU サポートスタッフ
Selena Smith さんと
Matthew Gear さん

Selena Smith さんと Matthew Gear さんも UQ-KU プロジェクトのサポートスタッフの一員です。Smith さんと Gear さんは工学・建築・情報工学部の大学院生です。

また、日本語通訳・翻訳修士課程 (Master of Arts in Japanese Interpreting and Translation: MAJIT) の学生も本プログラムをサポートしています。MAJIT プログラムは、日本語・英語両言語において翻訳・通訳に関する高いレベルの言語能力トレーニングを提供し、理論的かつ実践的なスキルの習得を目指します。

当時の教養学部 (現在は Faculty of Humanities and Social Sciences) に



UQ-KU プロジェクトを支援する MAJIT 生
上段 (左から右): 樽馬佐都子さん、田中幸さん、関根舞さん
下段 (左から右): リリアン・マールウさん、徳竹大地さん

設立された日本語学科 (現在の School of Languages and Cultures) が 50 周年を迎え、クイーンズランド大学の日本文化・日本語教育にとって 2016 年は記念すべき年となりました。

1975 年、日本語学科は 2 名のスタッフと 120 名の学生が在籍していました。この 50 年間で日本語・日本文化コースは大きく成長・発展し、2015 年時点で 1,500 名を超える学生が履修登録しています。

クイーンズランド大学における日本語教育の 50 年 (The 50 Years of Japanese at the University of Queensland) の写真を以下のウェブサイトでご覧いただくことができます。

<https://www.flickr.com/photos/138842785@No8/sets/72157662592821341/with/2604090269/>



2015 年の工学倫理を受講した九州大学の留学生たち

本周年記念や関連イベントについての詳細な情報は以下のウェブサイトをご参照ください。

<https://languages-cultures.uq.edu.au/50th-anniversary-japanese>

Q²PEC 2016

Q²PEC (Qshu-Queensland Program for English Communication) は 2015 年に成功裏に実施されました。2016 年現在、Q²PEC 第 2 弾の施行が決定しており、9 月には九州大学工学部の学生 30 名が Q²PEC 2016 に参加予定です。

クイーンズランド大学では、Renee Winton 氏と野北准教授がプログラムの最終調整を行っています。本プログラムには、クイーンズランド大学附属英語学校(ICTE-UQ)における 5 週間の集中英語コースや、ラボラトリー訪問、UQ の講師や学生らによるセミナーへの参加などが含まれています。

http://www.mechmining.uq.edu.au/filethin/get/3419/2016QPEC_Poster.pdf

クイーンズランド大学体験記

川見 洋一郎

クイーンズランド大学 機械鉱山学科(School of Mechanical and Mining Engineering)

修士課程(コースワーク)

受け入れ担当教授: Jin Zou 教授、工学・建築・情報工学部(Faculty of Engineering, Architecture and Information Technology)、機械鉱山学科(School of Mechanical and Mining Engineering)

初めまして。クイーンズランド大学(以下、UQ)で修士課程に所属している川見洋一郎と申します。私は、2015 年 3 月に九州大学理学府物理学専攻修士課程を修了し、博士課程に進学する目的で同年 7 月にブリスベンにやってきました。現在は UQ で修士課程に所属していますが、博士課程を開始できるように予定を立てています。さて、本ニュースレターでお伝えしたいことは 3 点あります。それは、なぜ UQ を選んだかについてと、本プロジェクトとの出会い、そしてオーストラリアでの生活についてです。

まず UQ に進学した理由ですが、セメスター開始の時期とコースワークプログラムの存在でした。オーストラリアは 2 月(前期課程)と 7 月(後期課程)に学期を開始することができます。3 月に卒業した私は、後期課程から開始することによって学期のブランクを最小限にすることができたため、オーストラリアの大学院への進学を決心しました。さらに、コースワークという座学と研究活動の両者が組み込まれているプログラムがオーストラリア進学決定打となりました。基本的に、他大学の博士課程に進学したいときは以前の研究とのマッチングや成果が重要となりますが、物理学という自然科学の発展を目指す学問から人間社会への応用に重きを



置いた工学(もしくは、応用物理学)へと専門を変更しようと思っていたので、座学を含めたコースワークプログラムは工学に対して門外漢である私に最適な選択肢を与えてくれたと思っています。数あるオーストラリアの大学の中でも、UQ は高いリサーチ実績、質の高い授業、並びに留学生に対する手厚いサポート充実していたので、進学先として選びました。

紆余曲折を経てオーストラリアにやってきましたが、実は目的

であった博士課程への進学にもオーストラリア滞在中に多少の不安がありました。しかし、UQ-KU Project の責任者である野北和宏さんに偶然お会いすることができ、UQ の博士課程に所属する学生という立ち位置のもとで本プロジェクトに関わっていくことを決心することができました。日本人の理系離れや英語離れが叫ばれて久しいですが、現状はその言葉通りだと感じます。ものづくりがこれまでの日本を牽引してきたことは明白ですが、近年の新興国などの台頭により“ものづくり日本”が置かれている立場は非常に厳しいものとなっています。現状から察するに、この傾向はさらに悪化の一途を辿ると思われる。しかし、研究者やエンジニア、さらにビジネスを学び日本を立て直そうとしている方が数多くいらっしゃいます。私もその一人として、UQ-KU Project を通じて日本に貢献していきたいと思っています。

最後に、私も積極的に海外に飛び出す若者を増やしたいと考えています。そこで、特に重要となる現地での生活について簡単に紹介したいと思います。オーストラリアは日本との時差もほとんどなく、南半球ですので四季の逆転はありますが、日本と同じように生活することができます。ブリスベンは寒暖の差が小さく、場合によっては真冬(7 月)に昼間の暖かさから半袖で過ごしている方も見かけたりします。食事に関しては、多国籍の料理を味わうことができ、中でも日本料理は寿司やラーメンを代表としてかなり愛されていると感じています。実際に大学では、歩きながら寿司を頬張っている学生さんを多く見かけます。スーパーでも日本食を見つけることができ、オーストラリアでも生活の一部となっていることが伺えます。また私がオーストラリアに来て一番驚いたことは、欧米圏ならではの大きさでした。ある飲食店では残り物をホームレスの人々に提供していたり、また募金活動をしている人たちに対して車を走らせながらクラクションを鳴らして“頑張ってる”というサインを送ったりという光景も数多く目撃しました。自身キャリアを別として、多くの教訓を学べる国であると感じています。

簡単でしたが、私がオーストラリアで感じたことや経験したことを伝えることができたと思います。九州大学の OB の一人として、ここオーストラリアから九州大学、そして日本を盛り上げていきたいと思っています。

クイーンズランド大学 交換留学体験記

井上千紘

九州大学文学部 言語学・応用言語学研究室4年
 留学期間:2015年7月27日~2016年6月25日
 留学先:クイーンズランド大学(オーストラリア)

私の専攻

私は2015年7月より一年間、母校・九州大学の提携校であるクイーンズランド大学にて交換留学させていただいています。私の専攻は言語学の類型論です。この分野は、言語同士の類似点を観察によって明らかにし、システムによって説明することを目標にしています。

私は類型論の中でも危機言語とよばれる絶滅の危機に瀕した言葉を記述することに興味を持っており、卒業研究のテーマとしては宮崎県椎葉村の、対格助詞(標準語では「ヲ」)の付き方が少し特殊な方言を選択しました。実は遠く離れたオーストラリアの少数言語にも、似たような言語現象が起こることがあるのです。これは純粋な偶然か、言語の特性上、起こるべくして起こったのか。話者の極めて少ない言語が、世界共通のルールを発見できる可能性を秘めているという点に、私は魅力を感じています。



キャンパス中心のグレート・コート

言語学を学ぶ場としてオーストラリアを選択した理由は、留学生向けの教育関連事業が国の歳入を支えるという世界有数の教育大国であり、かつ少数言語の絶対数が多いためです。これらの事実から専攻科目をより深く追求できるのではと考え、交換留学を決めました。

クイーンズランド大学の学びの特徴

●専門知識の追求

クイーンズランド大学では、より狭く深い形で自分の関心を掘り下げることが可能です。履修可能な科目数に、その違いが最もよく表れていると考えました。九州大学では一学期に最大30科目(6コマ×週5日)履修できるのに対し、クイーンズランド大学では3~5科目(同じ科目が週に数コマ)です。科目数が少ない代わりに一つの授業のウエイトが非常に大きく、その分専門性の高い授業を狭く深く学ぶことができます。さらにほぼ全ての授業の内容が高次の授業にリンクしているため、3年間のカリキュラム全体を通し、専攻科目を階層的・体系的に学ぶことができます。

●「理解」を深める工夫

クイーンズランド大学では授業が録画され、後から視聴可能であるため、日本の大学と異なり出席点は重視されません。ディスカッションや課題、試験を通し、内容を理解しているかということに主眼が置かれます。漫然と履修・卒業することを許さない厳しい姿勢こそある一方で、講師やチューターは非常にフレンドリーでした。質問や意見を歓迎する雰囲気であることから、疑問を持ち帰らずその場で解決することができ、効率的な学習が可能であるという点、学生のフィードバックを重視し、来期の授業改善に繋げようとする点が特に印象的でした。

●学生の熱意について

優れた教育システムに呼応する形で学生の熱意も高く、グループディスカッションの授業では議論の活発さについていくため、予復習が必須です。図書館の24時間営業の自習スペースは学生の心の拠り所で、テスト前や学

期末のみならず、毎週末徹夜で勉強する学生の姿が見られました。学びを当然のこととして最優先事項に置く学生たちの姿は頼もしく、オーストラリアの教育システムが機能していることの象徴のように思えました。

●施設の充実性

教育システムだけでなく施設面でも、勉学に適した環境が整っているといえます。私の通うセント・ルシアキャンパスは、シドニー・メルボルンに次ぐオーストラリア第3の都市ブリスベンの中心地から、バスで30分ほどの郊外に位置します。キャンパスについて特に私が気に入っているのは、オーストラリアと名高い景観の美しさに加えて、機能性を兼ね備えている点です。国際色豊かなレストランの並ぶ大食堂をはじめ、郵便局、病院、保育園、銀行に博物館に映画館にスポーツジム、美容院などが、30分あれば一周できるコンパクトな立地に収まっています。初日のキャンパスツアーでは、「大学全体が小さな街のようだ」という印象を受けました。思えました。

終わりに

クイーンズランド大学で学ぶ中で一貫して感じていたのは、「わが校で学ぶからには、専門知識を身に付けてから卒業してもらおう」という大学側の意地とプライドです。二か国の大学で学びを経験することで、日本の大学は良くも悪くも「学生の自律性」に期待するところが大きいのではないかという印象を受けました。教育システムをはじめとして、今まで疑問に思ったこともなかった自国の文化や制度が決して当たり前ではないということ、相対的に見てみればいずれの文化・制度にも長所と短所があり、それらの多くは表裏一体であることを体験できたのは、私にとって人生観が変わるほどに価値のあることでした。最後になりましたが、ご指導いただいた両大学の先生方、クイーンズランド大学で学ぶ機会を与えてくださったすべての方々に、心よりお礼を申し上げます。



シアターで講義を受講する生徒の様子

詳細は本プログラムのホームページをご覧ください

<http://www.mechmining.uq.edu.au/uq-ku-project>